

<調査報告>

## 新型コロナ禍を経たバリ島プンリプラン観光村に関する調査報告： 伝統的緑地テラジャカンをめぐる社会状況の変容

菱山宏輔\*<sup>1</sup>・加藤禎久\*<sup>2</sup>・Anak Agung Ketut Darmadi\*<sup>3</sup>

### Research Report of Penglipuran Village in Bali before and after the COVID-19 pandemic : Focusing on Changes of Social Conditions regarding Traditional Green Space *Telajakan*.

HISHIYAMA, Kosuke, KATO, Sadahisa and Anak Agung Ketut Darmadi

本稿は、2023年8月から9月に行われた、バリ島中山間地に位置するプンリプラン村でのアンケート調査結果をもとに、新型コロナ禍以前の社会状況との比較という観点から分析結果を提示するものである。比較対象となるデータは、2018年に筆者らがプンリプラン村において実施したアンケート調査結果である。分析においては、観光に関わる現地の状況を概観するとともに、特に、テラジャカンと呼ばれる伝統的な庭をめぐる、住民のかかわりがどのように変化したのかという点に注目した。その結果、「村」という単位での集合性の高まり、経済的活用もふまえたテラジャカンへの関心の高まり、かかわりの広がりや限定への2極化（国内旅行者へのかかわりの低減）というような傾向が垣間見えた。今後は、本稿において一次的な次元にとどまった分析をより深化させるとともに、補足のアンケートやインタビュー調査を行いながら、より実証的な研究を展開する必要がある。

キーワード：バリ島、テラジャカン、伝統的緑地、新型コロナ禍前後、アンケート調査報告

#### はじめに

本稿は、筆者らが社会生態学的観点から継続的に調査研究を行っている、バリ島のプンリプラン村 (Desa Penglipuran) についての調査報告である。プンリプラン村はバリ島の中山間地域に位置し、バリ州政府から伝統観光村に指定されている観光地である。村の目抜き通り沿いには、バリ島の伝統的な家屋敷が連なる風景が残され（再現され）ており、現状では主にインドネシア国内の観光客を集めている。

その風景の一部に、バリ島の伝統的な家屋の壁に面して、道路側に設置される「テラジャカン (Telajakan)」という庭がある。テラジャカンの維持・管理は主にその家の者が担うが、利用についてはその他住民に開かれており、生態学的な多様性も持ち合わせている。筆者らは近年、特に、テラジャカンをめぐる人びとの「かかわり」(コモンズ) に着目して研究を進めてきた(菱山・加藤 2021)。そこでの問題関心は次のようなものである。旧来のテラジャカンの社会生態学的多様性や人びと

のかかわりを媒介する機能が、観光村として発展してきたプンリプラン村においてどのように変化しているのか。

そのような問題関心から、2018年に住民を対象としたアンケート調査を行った。その際、特に重視された項目が、「テラジャカンの管理者は誰か」、「テラジャカンの特徴として重要なもの」、「テラジャカンを維持・管理するうえで参考とする情報源」、「テラジャカンを利用可能である人の範囲」、の4項目である。本稿では、2023年夏季に行われた第2回目の住民対象アンケート調査をもとに、2018年に実施した第1回目のアンケート結果と比較することで、新型コロナ禍前後の変化の一端に触れることにしたい。

#### 新型コロナ禍とバリ島観光

亀山 (2022: 86) によれば、バリ島を訪れる外国人観光客は次のように大幅に減少した。2019年には外国人観光客620万人(全体では1600万人)、2020年には105万9918人、2021年には43人となった。2022年にはングラーイ国際空港利用者数でみると215万4045人となっている。他方で、バリ島のインドネシア国内来訪者を見ると、2021年であっても4百万人以上である。割合で見ても、外国人観光客が2020年は前年比約17%になったとこ

受稿日2023年11月14日 受理日2023年11月24日

\* 1 専修大学人間科学部教授

\* 2 公立鳥取環境大学環境学部准教授

\* 3 国立ウダヤナ大学農学部教授

ろ、国内来訪者数は約43.5%にとどまり、2021年も極端な減少はみられない。新型コロナ禍のバリ島観光産業においては、このような国内来訪者をいかに誘致し得たかによって、その持続可能性において明暗が分かれたといえよう。プンリプラン村についていえば、2020年の来訪者数の前年度比は約13.3%であり、大幅に減少していたといえる。以上の数値をまとめたものが表1である。

なお、参考までに日本における出国者数と、羽田空港に限るが国内移動者数を見ておきたい(表2)。2020年の出国者数の割合は前年の約15.8%、国内では約42%であり、おおよそ、表1でみたバリ島来訪者の傾向と似通っている。しかしながら、2022年の回復の傾向をみると、日本では出国者数のもどりが比較的悪い傾向をみとることができる。

表1 各年のバリ島における外国人観光客、国内来訪者、プンリプラン村来訪者数

	外国人観光客	国内来訪者数	プンリプラン村来訪者数
2019	620万人	1054万5039	26万2401
2020	105万9918	459万6157	3万4841
2021	43	430万1592	3万6752
2022	215万4045	805万2974	

出典：亀山(2022:86)、Badan Pusat Statistik (a)、Badan Pusat Statistik (b)。プンリプラン村に関してはプンリプラン村観光局提供資料。

表2 各年の日本における日本人出国者数および羽田空港国内線利用客数

	日本人出国者数	羽田空港国内線利用客数
2019	2008万669	6886万8623
2020	317万4219	2897万2786
2021	51万2244	2583万5444
2022	277万1770	4639万2052

出典：総務省統計局 (e-Stat 統計名「出入国管理統計出入(帰国者数)表題「主要港別 月別 出国日本人」<https://www.e-stat.go.jp/dbview?sid=0003290049>)、羽田空港ターミナル公式サイト(「羽田空港旅客ターミナル利用実績」<https://www.tokyo-airport-bldg.co.jp/result/index.html>)

## 現地概況

今回、プンリプラン村における筆者らの現地調査は、2023年8月から9月にかけて行われ、共同調査としては2019年9月以来、4年ぶりのものとなった。そのための準備として、2022年8月には加藤が予備調査に入り、2023年3月には菱山が学生帯同の予備調査を行った。

筆者らは、現地に入る前の段階では、新型コロナ禍の

影響からプンリプラン村もまた疲弊した状況にあるであろうと予測していた。しかしながら、実際に足を運んでみると、これまでにないほどの活況を呈しているように見えた。時間帯によっては、人の密集のため道の端を歩く必要があったほどである。ドローンを飛ばして撮影する観光客もあり、同時に3台が飛び回る光景もあった。

村の新たなプログラムや設備も多数見ることができた。夜間の訪問や道路上での食事の実施、村の北部にあった竹林のテーマパーク化、各家屋敷の門の改修、村を紹介する液晶掲示板の設置、駐車場の新設、その周辺へのレストランの出店など、いずれも目に見える大きな変化が生じていた。上述表1からすれば、来訪者数は極端に減少していたことがわかるが、その間にも、来たる新型コロナ禍後の観光の再開を見越して、積極的な投資がなされていたといえる。

他方で、急激な来訪者の回復により、テラジャカンや道路沿いの芝生が踏み荒らされたり、寺院や建造物の装飾が壊れてしまったりという弊害も生じていた。そのため、テラジャカンへの立ち入り禁止の看板を立てたり、一定期間、芝生に囲いを設けて侵入を抑制したり、建造物の装飾を触らないように注意を促す看板が散見された。それに加え、多い時では1時間に数件、スピーカーによる呼び出しの放送が流れており、それもまた新型コロナ禍前にはなかった環境の変化である。それらは、場合によってオーバーツーリズムの兆候にもみえる。

そうした目に見える変化のなかで、テラジャカンをめぐる住民の意識はどのように変化したのか、アンケート調査結果の一部を2018年と比較しながら概観してみよう。

## アンケート調査実施概要

アンケートは2023年8月から9月のうち、1週間の留置のかたちで行われた。対象者は村の目抜き通りに面した各家屋敷の代表者であり、対象者数は76、有効回答数は44であった。前回の調査では回収率をあげるために、無効票(もしくは個別の無効質問項目)についての聞き取り調査を行った。しかしながら、今回はできるかぎり早期の公表を目的とし、補足調査をしない状態でデータクリーニングを行い、有効回答を用いて分析を行った。今回の調査においては、新型コロナ禍が生活にどのような影響を及ぼしたのかについて、オープンアンサーの項目を新設した。適宜、その回答内容にも言及したい。新型コロナ禍前後の状況の変化を知るうえでは、世帯収入の比較もまた重要である。菱山・加藤(2021)では、補足調査を実施したうえで世帯収入についての分析も行っ

ているが、今回の調査における回答数は極めて少なかったため分析から除外した。

### 調査結果

表3はテラジャカンを主に管理する主体についての多重回答結果である。2018年と比べて値や割合が増大した項目については、該当セルに色をつけてある（以下、全ての表において同様）。

まず、「本人」と、「その他の同居家族・親族」が管理する割合が高くなっていることに注目したい。現状では仮定にすぎないが、筆者らは、新型コロナ禍のバリ島において仕事の機会が少なくなった状況を見聞しており、本人が家にいる時間が長くなり、そのぶんテラジャカンの管理に携わる時間が増えたのではないかと想定できる。同様の状況から、例えば仕事のためにデンパサールに居住していた親族が同居することになったとすれば、そうした人びとが新たに管理に携わり、そのぶん、配偶者や子どもの出番は減るといことも考えることができよう。

表3 テラジャカンを主に管理する主体

	2018		2023	
	値	割合	値	割合
本人	126	42.4%	95	51.4%
配偶者	96	32.3%	31	16.8%
子ども	38	12.8%	10	5.4%
その他の同居家族・親族	26	8.8%	23	12.4%
相互扶助による	10	3.4%	25	13.5%
専門の業者	1	0.3%	0	0.0%
村政府	0	0.0%	1	0.5%
総数	297	100.0%	185	100.0%

出典：筆者らによるアンケート調査から作成

新型コロナ禍の生活変容についてのオープンアンサーでは、経済的困窮を中心とした生活苦についての回答を見ることができるが、その一方で「畑に携わる住民が多くなり、周囲の環境に良い影響がある」との回答もあった。ここからも、村外にて第2次、第3次産業に関わっていた人びとが、プンリプラン村にもどり、農業に携わり、同時にテラジャカンの管理にも関わるようになるという状況を想定することができる。

次に、「相互扶助による」については、割合だけでなく、実数が増加している点に注目できる。上述オープンアンサーでは、「コロナが相互扶助の機会を提供した」という回答がみられ、新型コロナ禍が村の中での結束を強めており、そのことがテラジャカンの維持管理の方法にも現れているといえる。

管理の主体として、今回、新たに「村政府」という回答がみられた。これは、各家が管理するという状況をこえて、観光開発を急激に進めて行く村政府が、より全般的な影響を及ぼすようになっていることの現れともいえよう。例えば、夜間に目抜き通りのライトアップがはじまったが、そのライトは村政府主導でテラジャカンに設置されたものである。他にも、観光客増加による生活環境の悪化に対応するために、村政府は清掃作業やテラジャカンの一部修繕作業に、村人を雇用するかたちで携わるようにもなった。観光客の急激な回復のなかで、住民による個別の対応だけではクリアできない問題も現れているといえる。

表4はテラジャカンの特徴として重要であると考えられるものについて、4件法のうち「重要である」もしくは「やや重要である」のどちらかに回答したものを集計した結果である。

表4 テラジャカンの特徴として重要であるもの

	2018		2023	
	値	割合	値	割合
経済的利益	30	54.5%	29	69.0%
個人の楽しみ	38	69.1%	28	66.7%
観光客の楽しみ	46	83.6%	33	78.6%
家の宗教儀礼のため	42	76.4%	28	66.7%
村の宗教儀礼のため	34	61.8%	28	66.7%
Penglipuran Berbunga のイベントのため	44	80.0%	37	88.1%
バリ島の伝統文化の維持	45	81.8%	30	71.4%
自然環境保護	49	89.1%	31	73.8%
こどもの遊び場として	14	25.5%	4	9.5%
近隣住民との会話のテーマとして	20	36.4%	12	28.6%
総数	55	100.0%	42	100.0%

出典：筆者らによるアンケート調査から作成

「経済的利益」を重視するという点では、新型コロナ禍において収入の手段に限られる（オープンアンサーにおいても「経済的困窮」に関する回答が多数あった）なかで、身近な観光資源としてテラジャカンの特徴が重視されているといえる。「村の宗教儀礼」と「イベント」は、村全体に関連した項目である。表3と同様に、村という単位での集合性が高まっていることが予想される。同時に、「イベント」は観光に直接結びつくものであるため、新型コロナ禍以後の観光の再活性化ということも見据えられているといえよう。

その一方で、「バリ島の伝統文化の維持」はバリ島全体、「自然環境保護」はさらに広義の価値観、「こどもの遊び場」と「会話のテーマ」はテラジャカンの副次的な「かかわり」の機能を見据えた回答項目であり、それらの解答割合は低下している。それらを鑑みても、全体として、テラジャカンがもつ価値は「村」という単位に集約されているとみることができよう。

表5は、テラジャカンを整備するうえでの情報源として重視するものについて、4件法にもとづく回答のうち、「重視する」もしくは「少し重視する」のどちらかに回答したものを集計した結果である。

ここではほぼ全ての回答において、数、割合ともに前回の調査を上回っている。自宅においてテラジャカンについて話をしたり、テレビやインターネットに触れる機

会が増えたり、上述したように村の影響力が増加したりという、新型コロナ禍の生活状況が反映されている可能性がある。あわせて、テラジャカンを観光のための主要な開発対象にするため、主導的な役割をしたN氏（菱山・加藤 2021：138）が他界したことも、影響している可能性がある。N氏はテラジャカンに植えられる草花や、テラジャカンの活用方法、テラジャカンをテーマにした「プリプランに花が溢れる」というイベントなどについて、プリプラン村の観光開発の方向性を決めるうえで大きな影響を与えてきた。そうした影響力が突如なくなることで、住民は、テラジャカンについての情報を自ら得る必要を感じたのかもしれない。

表6はテラジャカンを利用できる主体の範囲について質問した結果である。ほとんどの項目で値が増加しており、外部との接触が限られていた新型コロナ禍を経て、テラジャカンを介して人とかかわることの意識が高まっていることも推察し得る。

他方で、「インドネシア人観光客」については減少傾向である。新型コロナ禍をとおして設備やプログラムを整えてきたとはいえ、現在の国内観光客の急増のなかではそれらのキャパシティを上回るオーバーツーリズムの兆候も見えており、住民においては国内観光客への対応が難しくなっている可能性がある。

表5 テラジャカンを整備するうえでの情報源として重視するもの

	2018		2023	
	値	割合	値	割合
自分の考え	49	83.1%	42	95.5%
家族の意見	41	69.5%	42	95.5%
隣住民の意見	16	27.1%	36	81.8%
友人の意見	18	30.5%	40	90.9%
バンジャールの会議の決定	39	66.1%	42	95.5%
デサの会議の決定	39	66.1%	43	97.7%
テレビやラジオなどマスメディアの情報	24	40.7%	33	75.0%
インターネット上の情報	20	33.9%	41	93.2%
大学の先生など専門家の意見	24	40.7%	39	88.6%
造園業の店員の意見	14	23.7%	33	75.0%
バリアンの話	2	3.4%	5	11.4%
ロンタル	3	5.1%	9	20.5%
総数	59	100.0%	44	100.0%

出典：筆者らによるアンケート調査から作成

表6 テラジャカンを利用できる主体

	2018		2023	
	値	割合	値	割合
家族	54	94.7%	41	93.2%
同じ通りに住んでいる人	46	80.7%	40	90.9%
同じバンジャールの人	47	82.5%	42	95.5%
同じ村の人	47	82.5%	43	97.7%
他の村の人	25	43.9%	32	72.7%
他の島の人	25	43.9%	23	52.3%
インドネシア人観光客	31	54.4%	23	52.3%
外国人観光客	29	50.9%	23	52.3%
総数	57	100.0%	44	100.0%

出典：筆者らによるアンケート調査から作成

## おわりに

本稿は、2023年8月から9月に行われたアンケート調査の結果を早期に提示し、新型コロナ禍を経た観光地の動向を共有することを目的とした調査報告である。そのため、上述各表の数値の分析においては、想定や仮定を多く含んでいる。

そうした前提にたちながらも、以上からは次のような傾向を伺い知ることができた。全体として、新型コロナ禍を経て、プンリプラン村の観光およびテラジャカンをめぐる状況は大きく変化していると考えられる。アンケート調査からは、「村」単位への収斂、経済的活用もふまえたテラジャカンへの関心の高まり、かかわりの広がりと限定への2極化（国内観光客へのかかわりの低減）というような傾向が垣間見えた。同様に、オープンアンサーでは、新型コロナ禍をとおしてかかわりの重要性が感じられるようになったという点に注目できる。

今後の研究において、補足調査の実施、インタビュー調査をとおした解答の個別の意味についての分析、多変量解析による分析、植生調査結果を含む社会生態学的分析等を行い、より実証的なかたちで新たに論稿を提示したい。

## 参考文献

- Badan Pusat Statistik (a), “Banyaknya Wisatawan Mancanegara Bulanan ke Bali Menurut Pintu Masuk (Orang), 2022 : Number of Monthly Foreign Visitor to Bali by Gate (Person), 2022”.
- Badan Pusat Statistik (b), “Bali Dalam Angkat ‘Kunjungan Wisatawan Domestik ke Bali per Bulan, 2004–2022 : Number of Domestic Visitor to Bali by Month, 2004–2022’”.
- 菱山宏輔・加藤禎久, 2021, 「バリ島の伝統的緑地『テラジャカン』についての研究—公共性と『かかわりの正当性』」『住総研研究論文集・実践研究報告集』47: 131–141.
- 亀山恵里子, 2022, 「コロナ禍におけるインドネシアの観光と政府の施策」『地域創造学研究』32 (4), 71–93.

## 謝辞

本稿に関わる研究の一部は、令和2年度専修大学研究助成（個別研究「バリ島の伝統的小規模緑地テラジャカンの機能と公共性についての社会生態学的調査研究」）および令和3年度専修大学研究助成（個別研究「文化的ジェントリフィケーションがバリ島の空間変容に与える影響についての研究」）の助成をうけて行われたものである。関連して、新型コロナ禍での研究内容の修正・調整に対して、多大なご助力を頂いた事務局の方々にお礼申し上げたい。あわせて、現地では南山大学の吉田竹也先生から様々なご助言を頂いた。大学院生の野口真花氏からも多くの刺激を頂いた。ここに感謝申し上げたい。